〔論　文〕

自己概念の発達：乳児期，幼児期，児童期，思春期

鹿児島純心女子大学大学院　若本純子

和文要旨

本稿では，乳児期から思春期に至る自己概念の発達を論じた。発達過程を概括すると，自己を発見する乳児期，自己概念が分化し始める幼児期，友人との比較などを通して自己概念が大きく発達する児童期，思春期の自己概念は一時的には混乱するが，その後安定し複雑化することが示唆された。自己概念が飛躍的な発達を遂げる幼児期から思春期については，Harter（2006）の知見に基づき考察を行った。さらに，わが国の中学生の自己概念に関する実証的検討からは，思春期女子の自己評価の低さは，女子が自己の諸側面に対して高い関心を向けていることと関連していることが明らかにされた。

キーワード：自己概念，領域個別的自己概念，乳児期から思春期の発達，性差

「自分とは何か」との問い。誰もが一度はこの問いを自らに投げかけたことがあるだろう。さまざまな事象が不確実で相対化されたと言われる現代，「自分が何者かわからない，自分が確かなものとして感じられない」という人が増え，「自分」すなわち自己をめぐる検討の重要性は高まっている。

本稿では，先行研究の知見と実証データに則り，乳児期から思春期に至る自己概念の発達と，それぞれの時期における特徴について論じる。

自己概念の概念規定

心理学では1世紀以上前から，自己，自我，アイデンティティ，自己概念，自己意識などをテーマに膨大な研究が行われてきた。その中で，研究者の立場や理論的背景によって，これらの専門用語は厳密に細分化されて用いられている。まずは，自己概念の概念的な整理を行いたい。

James(1890)の分類によれば，自己には主体的側面と客体的側面がある。主体的側面はI(主我)とされ，知り，考え，行動する主体としての自己である。対して，客体的側面はme(客我)とされ，対象化され，知られるものとしての自己である。

自己概念は，自らが自分自身を対象としてとらえた「私は...である」という認知であり，Jamesの言うmeにあたる。自己概念には，自己に対する知識(knowing)と評価面の2側面が含まれる。全体的な自己に対する評価が自尊感情である。

近年，自己概念は，多面性・多元性を有する動的な認知的構成概念として理解され，その構造と機能を中心に検討されている。その中で，日常文脈における自己概念とは，たとえば自分の身体，自分の性格などのように領域ごとに独立して認識されること，加えて，自己のどの部分，どの次元(たとえば個人レベルの自己，他人レベルの自己など)が焦点化されるか，さらに自己に対しての知識や評価の内容は，個人の認知やスキル，そして社会的文脈の影響を受けて変化することが明らかにされている(伊藤，2002；中村，1990；沼崎，2002)。このような知見に基づき，昨今の研究において，自己概念は領域個別的な自己概念と包括的な自己概念，双方が用いられている。

一方，臨床的オリエンテーションをもつ人々にとっては，自己意識（e.g.，梶田，2002），アイデンティティという自己に関する用語のほうがなじみ深いかもしれない。アイデンティティは，Erikson(1950)の心理社会的発達モデルにおいて，

青年期の心理社会的危機「アイデンティティの獲得 対 拡散」として示された。青年期における身体面・心理面の発達および社会・文化からの要求を受け，それまでの自己を再構成することで形成されるアイデンティティは，時間的連続性と斉一性を伴う(Erikson, 1968)。Eriksonのアイデンティティの概念では，「自分は他ならぬ自分である」との自覚の確立だけでなく，そこに向けての主体的取り組みが重視される。つまり，アイデンティティは，Jamesが言うIとme双方の要素が含まれた包括的概念としての性向が強い。

これら自己概念，アイデンティティの概念的特徴に見合う形で，アイデンティティに関する発達研究は青年期以降の人々を対象に行われ，自己概念についての発達研究はその発生から多様化，複雑化の過程が含まれる幼児期から青年期において盛んである。しかし，自己研究が発達心理学，社会心理学，臨床心理学などの領域を超えて展開される中で，自己が外的・内的要因双方からの影響を受けながらそれ自身発達しつつ，文脈に即して機能する発達のエージェントであり，葛藤や困難への緩衝効果をもつことなどが示唆され(e.g., Baltes & Baltes, 1990)，自己概念の発達研究の対象も全世代へと拡大している。これらの知見は自己の構造や機能の理解に広く寄与するもので，特定の概念や領域の枠にとどめるのは無為であるとの指摘も見られる(Lapsley & Power, 1988)。どのような概念に基づくものであろうとも，自己に関する研究が，生涯を通じての，ないしは各発達期においての心理学的特徴をきわめて端的に反映する点は共通しており，その重要性が示唆される。

各発達期における自己概念の発達

乳児期

乳児期の自己に関する最初の焦点は，「自己はいつ頃どのように現れるのか」にある。昨今の発達心理学においては，乳児は知覚，認知，対人相互作用においてきわめて「有能」であり，生まれた時点で備わっている諸感覚を使いながら，環境に対して選択的かつ能動的に働きかける存在であることが共有されている。自己についても，生まれた時に，すでに，ある側面は備わっているという考え方が一般的である。たとえばNeisser(1993)の言う生態学的自己や対人的自己は，環境や人の知覚を行う際に必然的に伴う主体的自己の自覚を指すが，生まれてから間もない乳児が行う，自らを基点として動く物や人を見つめるという行動や，おとなの顔を見てその表情をまねる原初反射――視覚的に捉えた他者の顔とその動きと，自分の身体の部位と動きとを対応づけが生まれながらできると理解される(Meltzoff & Moore, 1983)――などに裏づけされる。

同様の考え方はStern(1985)にも見られる。乳児の主観的体験に重点を置いた観察から，Sternは，ハンドリガード(子どもが自分の手を見つめる行為)などに示されるように，乳児は自己を身体的単位として体験し，主体としての自己感(the sense of self)である中核的自己が形成されると述べている。それはおよそ2～6ヶ月の間の出来事であるが，その前から自己感の出現の過程は始まっているという。これらの知見で示唆されている乳児期の自己とは，JamesのI，自己の主体的側面である。

それでは，me，客体としての自己はいつ頃から見出されるのであろうか。上述したStern(1985)は，18ヶ月以降，子どもは自分を客体化し，言語の獲得と使用によって客体的な自己が確立されていくとする。同様の見解をもつ研究者は多いが，Lewis & Brooks-gunn(1979)は，乳児に気づかれないように鼻に口紅をつけておき，鏡を見せるという実験を通して，鏡の中の自分を見て自分自身の鼻に触れることが18ヶ月を境に急激に増えることを示した。これは，この時期以降の乳児が，主体としての自己の体験に加え，自分自身を客観視し，客観的存在として表象できることを表している。

幼児期から児童期

幼児期以降，記憶や概念理解などの認知発達と，養育者や仲間・友人など周囲からの社会的なかかわりによって，自己をめぐる発達は飛躍的に進展していく。自己の発達については数多くの概観論文や著書があるが，ここではHarter(2006)の論文をもとに，幼児期から思春期にかけての自己概念の発達を概観していこう(表1)。

表1　Harter（2006）による幼児期から児童期の自己概念の発達

時期	自己表象，自己評価の特徴	内的要因(認知発達)との関連	外的要因（社会的相互作用）との関連
幼児期	・観察可能で，具体的な自己の側面や，自分の好みや所有しているもので自己を描写する傾向 ・身体面，社会面，活動などの側面が相互に関連のない個別のものとして認識され，統合されていない ・現実自己と理想自己を区別できず，混同している。 ・非現実的に肯定的な自己評価を行う ・子どもの自己評価の内容は行動の特徴として現れる。しかし，スキル(能力)やコンピテンス(有能性)とは直結していない。	・さまざまな領域を結合させる認知能力が不十分 ・複数の概念の関連付けがうまくいかないため社会的比較の能力が不十分 ・人間は善と悪など正反対の両面を同時的に持ちうることが理解できない ・社会的望ましさへの反応 ・他者の意見を取り込むことが難しい ・言語発達に伴い，親子の相互作用を通して経験が記憶として蓄積され，自伝的記憶とそれに伴う自己を形成していく	・同性の親を取り込みながら自己表象を形作り始める ・自己表象を拡大させるため，親の言葉かけが重要。
児童期前半	・前の期に引き続き，自分ができることや，自分の好きな面などの記述が中心だが，領域同士の関連付けが可能になり始める ・しかし，善悪や肯定・否定の感情など両極の状態像はまだ統合できない ・Iがmeを評価できるほどには発達しておらず，前の時期に引き続き，過度に肯定的な自己評価を行う傾向にある	・心に対する理解不足（二面性があることが理解できない） ・興味は外界に向かっており，自己に対して向いていないため，自分自身を内省し，批判する事は難しい ・自分を知るために他者を利用し始めるが，他者の基準や意見を内在化することは難しい。また，この時期の子どもは他者との比較よりも，過去との時間的比較を使いがちである。	・親との相互作用の中で，親が期待する基準や親がもつ自分に対する評価について理解し始める ・家族内でのかかわりのありようは子どもの自己表象の個人差のもととなる。 ・親と子の小さなすれ違いの経験が，子どもの万能感を弱め，自己と他者の違いに気づき，現実的な自己感を育むことにつながる。
児童期後半	・さまざまな自己の性質が上位概念へとまとめられ，統合されてくる ・肯定的な面と否定的な面が統合された自己表象システムが見られるようになる ・理想自己と現実自己は区別され，その解離は年々大きくなる ・これまでの時期に比して，自己評価が低下する ・この時期の子どもにとって重要な側面（外見，人気，学業成績，運動能力など）の評価が低い場合には，自尊感情などの全体的な自己評価もダメージを受ける	・自分の能力を見積もるために級友や友人と比較する ・それは，比較に必要な2つの概念を同時的に関連づけることができる認知能力が発達したことによる ・また，社会的比較が使用されることで，現実自己に対する評価が下がる一方，社会的な基準や期待を取り込むことによって，理想自己がより高くなっていく。	・学校という場は，級友との違いに目を向けさせる場であり，友人や級友との関係を示す自己記述も増えるなど，同年代の友人が及ぼす影響は大きい ・認知的には比較が可能になっても，社会的比較を用いることができるかは，学校，家庭などの環境要因の影響が大きい。というのは，親や教師が社会的比較を用いることが増え，子どもはさまざまな場で社会的比較を行うようになる ・親との相互作用は子ども時代を通して重要であるが，この時期は仲間・友人との関係がきわめて重要である

幼児の自己概念は，外から見える具体的な面が中心となるが，性格特性などの内面にも言及される。加えて，幼児は自己の諸領域を個別かつ独立したものと捉えている。昨今の研究によって，従来に思われていたより，幼児の自己概念が内容的にも構造的にも発達していることが明らかにされている。これは，幼児の認知発達に関する知見を踏まえた新たな方法論の開発と適用によるところ

が大きい(久保, 2002 ; Marsh, Ellis, & Craven, 2002)。同時に，幼児は概念理解，社会的比較，他者視点の取り込みといった能力がいまだ十分ではないため，過度にポジティブな自己評価を行う点も特徴的である。

児童期の前半(5～7歳)について，Harter(2006)では，幼児期の自己表象や自己評価の特徴が引き続き見られることが示唆されており，児童期後半への移行期といった感がある。わが国において，この時期の子どもたちが，どのような人格特性語を用いて自己描写を行うかを検討した佐久間・遠藤・無藤(2000)によれば，5歳児では「やさしい」「いい子」「おりこう」など4種類だったのに対し，小学校2年生では語の種類は3倍強になり，ポジティブな自己描写だけではなく，「わがまま」「威張り気味」などのネガティブな描写も現れ始めている。

児童期の後半(8～11歳)になると，自己概念は組織化され，自己システムが統合されてくる。自分自身には，ポジティブな面，ネガティブな面ともにあることが矛盾なく受け入れられているがゆえに「いい試合ができてうれしかったんだけど，負けちゃって悔しかった」といった多元的な自己感情を表現できるようになり，基本的には成人と同水準の自己理解が可能になる(久保, 2002)。その一方で，この時期には，社会的比較が可能になり，外的基準を取得することによって，現実自己に対する評価が低下する。児童期の自己評価が小学校の低学年をピークに，高学年に向けて低下していく傾向は，海外，国内を問わず見出されている(e.g., 蘭, 1985 ; Rosenberg, 1979)。

認知方略の発達に伴う普遍的な発達的側面がある一方，児童期の自己概念の発達においては社会文化的影響も見出される。先に挙げた佐久間ら(2000)において，5歳児，2年生，4年生すべて協調性に関する言及が見られた点について，協調性を重視する日本ならではの現象であろうと指摘されている。また，学年が上がるに従って，勤勉性や外向性についての言及が増加していくことについても，学校生活による影響が示唆される。

思春期

青年期は，児童期に萌芽が見られた自己概念の複合性が徐々に精緻化され，安定していく時期であるが，思春期はその先駆けの時期として，自己概念に大きな混乱を生じることが知られる。

青年期全般を通しての自己概念の発達に関して，Harter(2006)は，他者との関係に依存して変動する「関係的自己」の発達を基軸に説明している。人は自己に関する知識や概念を複合的に持っているが，ある面が活性化され自己概念として認知される際，他者との関係に即して表象されたものが関係的自己と呼ばれる(沼崎, 2002)。実際，青年たちは家族や友人など相手によって，また学校や家庭など場面によって，自己の違った側面を見せる傾向にあり，青年期の自己を特徴づけると見なせるであろう。

さらに，Harter（2006 ; 表2）によれば，思春期と重なる青年前期から中期にかけては，表象される自己の諸相は最大量に達するにもかかわらず認知的スキルが十分ではなく，他者の意向も適切に処理できないために，自己表象や自己評価が変動することに対して葛藤や混乱が見られる。しかし，青年後期に入ると，自己の複合性が概念的に理解されるのと同時に，その適応性も認識されるようになる。

自己評価をめぐっては，児童期から青年期にかけて自己評価が低下する点，男女を比較した際に，女子の得点のほうが低い点は，Harterのみならず多くの研究が共通して指摘している(e.g., 遠藤, 1992 ; 高田, 1992)。とくに，思春期の女子の身体や外見に関する自己評価の低さは顕著とされる。しかし，自尊感情の性差に関するメタ分析を行ったKling, Hyde, Showers, & Buswell(1999)では，男女差は見られたもののエフェクトサイズは小さかったことから，より明確な性差が指摘されている領域個別的な自己概念(e.g., Marsh & Hattie, 1996)を用い，性別による自己経験の違いを明らかにすることで，自尊感情の性差に関するより詳細な理解が可能になるだろうと述べている。

わが国の中学生における領域個別的自己概念

Kling, et al.(1999)の指摘を踏まえ，2009年に東京都の中学生を対象に調査されたデータをもとに検証してみよう。若本(2010a)は，自分自身に

表2　Harter（2006）による思春期（青年前期・中期）の自己概念の発達

時期	自己表象，自己評価の特徴	内的要因(認知発達等)との関連	外的要因(社会的相互作用等)との関連
青年前期	・自己描写では，対人面，他者との相互作用と関連のある社会的スキルや対人魅力についてのものが目立つ ・自己の分化が促進し，それぞれの特性を統合した，より上位の抽象的な自己概念を構成できるようになる ・文脈によって異なる自己描写がなされ，それらは独立した別々のものとされる傾向にあり，それらが相互に矛盾したり，葛藤を起こしたりしているが，当人たちはそれに気づかない(あるいは構わない) ・幼児期に見られた自己構造が，あたかも抽象概念を用いて行われているように見えるほど，この時期の自己概念は往々にして非現実的である ・自己評価も各領域に対して別々に行われる傾向 ・自尊感情などの全体的自己評価も文脈によって変動する(Harterたちは，このような関係性に依存して変動する自己構造を関係的自己(評価)としている)	・抽象思考が可能になる ・自分自身の自己システムに対するさまざまな仮説は持っているが，それを検証しうるだけの推論の力がまだ育っていない ・また認知的な統制が不十分であるために，過度な一般化という思考傾向や自己感の揺らぎなどが見られる ・他者が自分をどう見ているかに対する感受性が高まっている ・社会的比較はひき続き用いられているが，露骨な比較を行うことで否定的に受けとられないよう，目立たない形で行われるようになる	・さまざまな関係性の文脈によって異なる扱いやかかわりが行われるため，自己表象や評価の一貫性のなさにつながる ・この時期の子どもは，他者からの評価に対して非常に高い関心をもっているため，他者の意見に応じて自己評価を変動させがちである。 ・この時期，所属が小学校から中学校に変わることは多大な影響を及ぼす。中学校は努力よりも能力がクローズアップされる場であり，個々の成果が公にされることになる。これによって，社会的比較は強化される一方，他者からのフィードバックが苦痛な子どもたちも増えてくる。 ・親の影響，友人の影響については諸説ある。大方は友人の影響力の大きさを示唆するものであるが，親の影響も低下してはいない。 ・マスコミに流布されるモデルやスターなどは，第二次性徴を迎えたこの時期の子どもたちにおとなになるにあたっての魅力や「基準」として取り入れられていく。そして，それが自尊感情の規定因となる。
青年中期	・自分の中の諸々の面をわかっている。その中には正反対の性質をもち矛盾するものも含まれる。それらの数がこの時期最も多くなる。 ・さまざまな自己表象の見かけ上の矛盾にとらわれ，それらを自己システムの中にうまく統合できない。また，どれが本当の自分かを思い悩み，自己表象は非常に不安定である。 ・この時期の自己表象をめぐっては葛藤や混乱，苦悩が経験される。その傾向はとくに女子で強い。 ・内省能力の高まりから，理想自己と現実自己との格差は非常に大きくなる。とくに身体の外見については顕著である。 ・自分の中での矛盾のため，自己評価や自己調整にも混乱や不安定さが生じる ・自尊感情の水準が関係の文脈によって変動することも，この時期から顕著になる ・矛盾した基準やフィードバックを与えられるため，この時期の自尊感情は低い水準にある	・この時期の子どもたちは内省的になるのと同時に，他者が自分をどのように思っているかを強く気にしている。他者の意見を自分がどうあるべきかの情報としているため，重要な他者の意見や期待に合わせようとして矛盾に苦しんだり，どれを取り入れるべきか迷ったりする。 ・自分の中にある異なる（真逆の）面を矛盾のない形で統合できるほどの認知能力が育っていないため，葛藤や混乱，苦痛を抱えている ・男子に比べ女子のほうが自己表象の矛盾を経験しやすいが，その中でも女性的な志向性が高い女子のほうが強い葛藤を感じている。その理由としては，女子のほうが他者との関係性に重きを置くことがある。 ・この時期の認知能力において，他者の意見の解釈が十分にできないという限界がある。自分の考えと他者の考えとが区別できず，自分の懸念を他者に投影することなどもままある。加えて，自分の経験がきわめて特殊であり，他者には理解できないと主張しがちである。 ・気分に波があることもこの時期の特徴である	・この時期，重要な他者の意見や期待は非常に強い影響力をもつ。複数の重要な他者からの異なる意見が，この時期の子どもたちに混乱や葛藤を起こさせている面もある。また，この時期になると，民族の伝統的考え方なども，自己表象の基準として取り込まれるようになる。 ・友人と親（父親と母親とで異なることもある）では意見や期待が大きく違うと認識されている

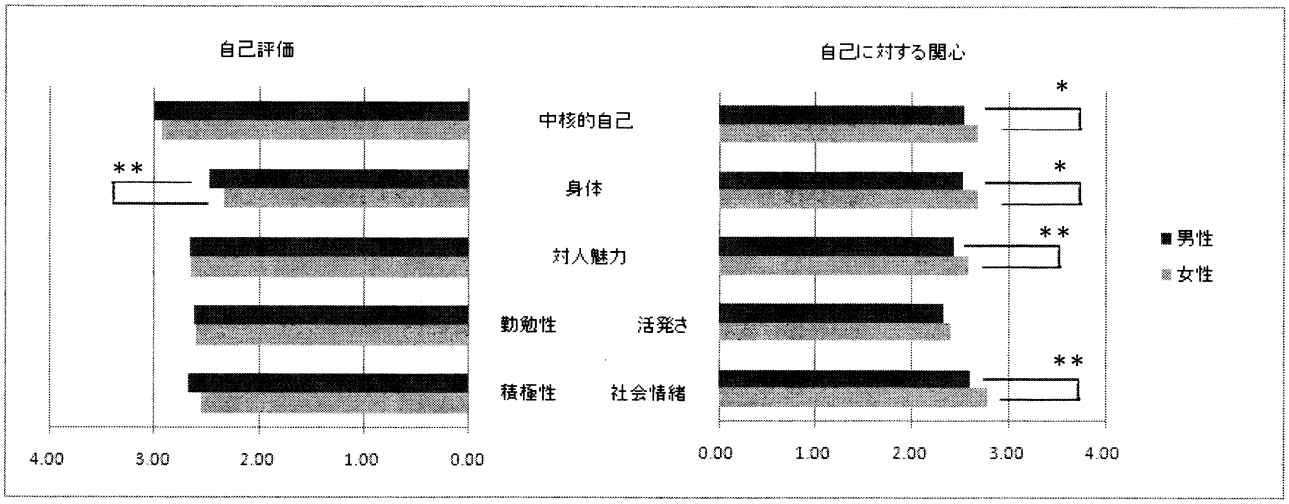
対する生き方，健康状態，学力，協調性，顔立ち，家族との関係など27項目について，どの程度満足しているかを問うことで収集された，領域個別的な自己評価のデータに対して因子分析を行った。その結果，友人関係，思いやり，明るさなど中学生にとって自己の中心的な要素と目される9項目からなる「中核的自己」，まじめさ，学力，責任感など7項目からなる「勤勉性」，積極性，リーダーシップなど4項目からなる「積極性」，運動能力，体つきなど4項目からなる「身体」，やさしさ，異性に対する魅力など3項目からなる「対人魅力」の5因子が得られた。

それらを尺度得点とし，性別によって比較したところ，先行研究通り女子のほうが「身体」に対する自己評価が低いという有意差が見られたが，他の側面では有意差は見出されなかった。Harter(2006)は，女子での児童期から思春期にかけて自己評価が低下し，男子と比べてより低い背景として，社会文化的に押しつけられる美や成功の基準と自分の姿との落差から生じる身体に対する不満足感を挙げ，その結果生じる抑うつ，理想像に近づこうとする努力としてのダイエットと，それを引き金とする摂食障害の発症などにも言及している。日本においても，高校生の9割，中学生の8割，小学校高学年の4割の女子が「痩せたい」と思っているとの報告(平成16年度児童生徒の健康状態サーベイランス)もあり，東京都の中学生の「身体」における自己評価の性差に関しては，同様の説明が成り立つであろう。

一方，同じ27項目に対して「どの程度気にしているか，あるいは気になるか(領域個別的な関心：e.g.，若本・無藤，2004)」を質問した上で因子分析したところ，同じく5因子が得られた。

しかし，因子構造は異なり，「中核的自己」「身体」「対人魅力」因子に加え，「活発さ」と「社会情緒面」が抽出された。「いまの自分」という項目が，自己評価では「中核的自己」に含まれたのに対し，関心では「対人魅力」に含まれていた点も含めて，中学生の自己をめぐる経験は，自己評価と自己に対する関心では質的に異なることが見出された。

加えて，関心では「活発さ」以外の4変数に性別による有意差が見られ，女子のほうが自己のさまざまな側面に対して高い関心を向けていることが明らかにされた(図1)。



**:$p<.01$, *:$p<.05$

図１　中学生の自己評価と自己に対する関心における性差

この結果は，伊藤(1998)が示した，高校生女子は異性を意識し自分自身への関心が高まることで，コンプレックスから自己評価が下がるという心理過程と類似していると思われる。すなわち，先行

研究が指摘してきた思春期の女子の自己評価や自尊感情の低さは，女子が自己に対して関心が高いことと関連していると考えられる。

また，この結果は，思春期固有の自己概念の特徴をも含んでいる。若本・無藤(2004)が設定した「関心」という自己概念は，もともと中高年期の人々が，老いが生じている自己に対して向ける関与である。そして，中高年期の人々を対象とした検討において，老いが生じている自己の領域に対して「関心」が払われている人々は，その領域の衰えによって部分的な自己評価が低下しても，自尊感情は低下しにくいことが明らかにされている。すなわち，中高年期においては，老いの生じた自己領域に対して「関心」を払うことが自尊感情低下のリスクを防止するのである。

しかし，中学生の結果は異なり，自己に対して「関心」が高いことと自己評価が低いこととの関連が示唆された。これは，Rosenberg(1979)が示した自己関与，自己評価と自尊感情との関連――自尊感情に対する領域個別的自己評価の効果は自己関与の程度に依存し，高い関与が払われる自己領域に対する評価が自尊感情へ高く寄与する――に一致する結果である。若本・無藤(2004)とRosenberg(1979)の知見を総合すると，中高年期の人々の「関心」は，ある自己の領域に対して「どの程度気にしているか，あるいは気になるか」という両面をもつのに対して，中学生の場合は，能動的な関与というよりも，受動的な関与である「気になってしまう」という側面が強いのだと思われる。若本(2010b)の中年期の人々を対象にした研究によれば，多くの自己領域に対して「関心」が高い人々は，特性不安と，BIG5パーソナリティ特性の情緒不安定性が高いというリスク的な特徴があるという。対象の違いを考慮する必要はあるが，思春期では女子の自己概念のほうが男子に比べてリスク的である，との説明として，「関心」の高さとそれに伴う情緒やパーソナリティのリスクを挙げることができるだろう。

本稿では，人生の前半，乳児期から思春期に至る自己概念の発達について先行研究の概観をもとに論じた。また，思春期の自己概念については東京の中学生のデータをもとに，女子の自己評価が低い背景に関して，「関心」の高さとの関連を見出した。このように，自己概念は，各発達期における心理的特徴とともに，臨床的な課題と説明をも提供してくれる。自己概念については，すでに非常に多くの研究が実施されているが，さらなる発展が求められる心理学的テーマである。

文献

蘭　千壽(1992). セルフ・エスティームの形成と学校の影響　遠藤辰雄・井上祥治・蘭　千壽(編), セルフ・エスティームの心理学：自己価値の探求 (pp. 57-70).　ナカニシヤ出版.

Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (Eds.) (1990). *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences.* New York: Cambridge University Press.

遠藤辰雄(1992). セルフ・エスティーム研究の視座　遠藤辰雄・井上祥治・蘭　千壽(編), セルフ・エスティームの心理学：自己価値の探求 (pp. 8-25).　ナカニシヤ出版.

Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society.* New York: Norton.

Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis.* New York: Norton.

Harter, S. (2006). The self. In W. Damon, R. M. Lerner, & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology: Vol.3. Social, emotional, and personality development* (6th ed., pp.505-570). New York : Wiley.

伊藤忠弘(2002). 自尊感情と自己評価. 船津衛・安藤清志(編), ニューセンチュリー社会心理学：1 自我・自己の社会心理学 (pp.96-111). 東京：北樹出版.

伊藤裕子(1998).　高校生のジェンダーをめぐる意識　教育心理学研究, 46, 247-254.

James, W. (1890). *Principles of psychology.* New York: Henry Holt.

梶田叡一(編著)(2002). 自己意識研究の現在　ナカニシヤ出版

Kling, K. C., Hyde, J. S., Showers, C. J., & Buswell, B. N. (1999). Gender differences in self-esteem: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 125, 470-500.

久保ゆかり(2002). 自己の発達. 船津衛・安藤清志(編), ニューセンチュリー社会心理学：1 自我・自己の社会心理学 (pp.44-59). 東京：北樹出版.

Lapsley, D. K., & Power, F. C. (Eds.)(1988). *Self, ego, and identity: Integrative approach.* New York: Springer-Verlag.

Lewis, M., & Brooks-gunn, J. (1979). *Social cognition and the acquisition of self.* New York: Plenum Press.

Marsh, H. W., Ellis, L. A., & Craven, R. G. (2002). How do preschool children feel about themselves?: Unraveling

measurement and multidimensional self-concept structure. *Developmental Psychology*, 38, 376-393.

Marsh, H. W., & Hattie, J. (1996). Theoretical perspectives on the structure of self-concept. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept* (pp.38-90). New York: Wiley.

Marshall, R., & Tucker, M. (1992). *Thinking for a living: Education and wealth of nations*. New York: Guildford.

Meltzoff, A. M., & Moore, M. K. (1983). Newborn infants imitate adult facial gestures. *Child Development*, 54, 702-709.

中村陽吉(1990). 「自己過程」の社会心理学. 東京大学出版会

Neisser, U. (1993). The self perceived. In U. Neisser(Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal source of self-knowledge*(pp.3-21). Cambridge: Cambridge University Press.

沼崎 誠(2002). 自己概念. 船津衛・安藤清志 (編), ニューセンチュリー社会心理学：1 自我・自己の社会心理学 (pp.78-95). 北樹出版

Rosenberg, M. (1979). *Conceiving the self*. New York: Basic Books.

佐久間(保崎)路子・遠藤利彦・無藤 隆(2000). 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して. 発達心理学研究, 11, 176-187.

Stern, D. (1989). 乳児の対人世界：理論編 (小此木啓吾・丸田俊彦, 監訳, 神庭靖子・神庭重信訳). 岩崎学術出版社. (Stern, D. (1985). *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York: Basic Books, Inc.)

高田利武(1992). 自己概念の特質と形成. 加藤隆勝・高木秀明(編), 青年心理学概論(pp.33-49). 誠信書房.

若本純子(2010a). 『東京都版自尊感情』の構造における男女差：領域個別的な自己概念との関連から. 東京都受託研究報告書「自尊感情や自己肯定感に関する研究」(研究代表者：伊藤美奈子), 60-67. 慶應義塾大学.

若本純子(2010b). 中年期の老いの自覚と対処における「関心」の向け方による相違　教育心理学研究, 58, 151-162.

若本純子・無藤隆(2004). 中年期の多次元的自己概念における発達的特徴―自己に対する関心と評価の交互作用という観点から　教育心理学研究, 52, 382-391.

Abstract

Development on self-concept: From infancy to puberty.

This article described development on self-concept from infancy to puberty with literatures, included Harter (2006), and a survey research with junior-high-students in Tokyo. In summary of literatures, it was found a discovery of self in infancy, a differentiation of self-concepts in toddler and preschool, a remarkable progress of self-concepts with social comparison in school age, and a stable and complicate self-concepts in puberty, in spite of temporary confusion. In an examination of data of junior-high-students, low self-evaluation of girl had a relation with high domain-specific concerns.

KeyWords：Self-concept, Domain-specific self-concepts, Development from infancy to puberty, Gender differences with self-evaluation in puberty